

三河アララギ

平成二十九年 2017年

七 月 号

第 六 十 四 卷 第 七 号



ニューヨーク日記(129) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

LE COUCOU QUENELLE DE BROCHET

Blue Shoe Diaries



去年ニューヨークで一番開くの期待されたレストランはフランスのLe Coucouでした!もちろん予約取るの大変!今年になっても大変。でも行ける日が来たのです!だから行く前からメニュー勉強して意外な感じのとってもクラシックな quenelle de brochetが話題になってると聞いて私もクネル頼みました。もー美味しいって。想像してなかったけどすごく味と食感のバランスがパーフェクトでした。上品な味だけどしっかりとした味。記憶に残っちゃいましたね。

The most anticipated restaurant opening last year was clearly Le Coucou. Bringing the chef Daniel Rose of Spring fame in Paris to the US where he never had a restaurant! So when I got to go, I studied the menu. And surprisingly or daringly, a very french classic dish of quenelle de brochet was making the biggest splash. So I had to try it. Visually beautiful, tasted even better. The texture had a nice bounce to it while remaining delicate, the flavors were balanced perfectly with the airy lobster sauce playing nicely with the quenelle. Memorable, definitely.

目次

第六十四卷第七号(通巻七六三号)

表紙・ビンボウカズラ	今泉 由利 (1)	山崎 俊子 (26)	森岡 陽子 (33)
ニューヨーク日記(129)	Blue Stone (2)	三田美奈子 (26)	田中 清秀 (33)
黄素馨の門	御津 磯夫 (4)	水野 絹子 (26)	重野 善恵 (34)
歌集「かぜくさ」	大須賀寿恵 (5)	牧原 規恵 (26)	今泉 由利 (34)
歌集「草々」	今泉 米子 (6)	稲吉 友江 (26)	今泉 如雲 (34)
歌集「はゞきくさ」II	河原 静誠 (7)	鈴木美耶子 (27)	植村 公女 (35)
五月雨ふる夜	岡本八千代 (8)	吉見 幸子 (27)	「二茶名句集」
ワイン	今泉 由利 (9)	牧原 正枝 (27)	かさね吟行会
端午の節句	弓谷 久子 (10)	石田 文子 (27)	『酔いの徒然』(63)
新しき	内藤 志げ (11)	森 厚子 (27)	本からのあれこれ(20)
蒟蒻の花	林 伊佐子 (12)	現代学生百人一首	ある自然科学者の手記(62)
ふたりを包む	安藤 和代 (13)	東洋大学	
早朝	清澤 範子 (14)	安藤 朱生 (28)	大橋 望彦 (42)
思いつくまま	伊藤 忠男 (15)	廣瀬 茉優 (28)	絹の話(80)
ソラマメ	鈴木 孝雄 (16)	福地 一貴 (28)	短歌に詠まれた茂吉 七十回
青梅	森岡 陽子 (17)	野呂 健太 (28)	楽しい時間(56)
五月晴れ	足立 晴代 (18)	小澤 研二 (29)	漢詩研修(9)
常に母の日	阿部 淑子 (19)	宇田 詩織 (29)	雑草とは何
地水火風空	白井 信昭 (20)	杉本 椎 (29)	「氷魚」のことから(198)
母の里	杉浦恵美子 (21)	太田 双葉 (29)	ことのはスケッチ(46)
紫蘭の花	山口千恵子 (22)	童謡「笑顔のスキップ」 高橋 育郎 (30)	いそを まつお
庭の雑草	夏目 勝弘 (23)	『歴代天皇御製歌』(七十七)	編集室だより(二〇一七年五月)
歌集「夢のつづき」	水上 信子 (24)	『俳句』	三河アララギ (58)
『歴代天皇御製歌』(七十六)		貫名海屋資料館 (31)	野菜の花(13)
貫名海屋資料館 (25)		山元 正規 (32)	お知らせ「三河アララギ」について (60)
『いとよせ』 いーはこぶ		柳田 皓一 (32)	
		山元 京子 (33)	
		山田 京子 (33)	

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

苔の上におちて二三日ありへつつ濡れいろおもき赭き杉の穂

ひるねより覚めてなほふる雨のなか風だつまへをゆらく竹むら

寒あやめただひと花のむらさきに老いてわがあふ昭和元禄

竹やぶの中ゆく音は虎ならず野良犬のら猫老耄われと

ひるまへの外来終へていねむとす小鳥うごかぬひとときのまを

咲きいづるさくらの枝を小鳥らは羽根はばたかず潜りとびゆく

さきたるは花びらそよぎかがやけり^{はや}迅きいのちはささやきに似る

松の間にのびたる枝は花多し散りゆくまへを光りゆらぎて

花びらを^く昨ひのみこみてとび去りし小鳥のかほをおもひつつをり

さくら花咲ききはまりて照りかへす光まぶたにわがねむりゆく

歌集「かぜくさ」

大須賀寿恵

指名さるを待ちゐる大会々場にわれの唇乾ききりたり

ペンを持つ吾が手のふるへとどまらず私情を入れし討論の中

もちひ焼きし吾手の匂ひいつまでも床の中にて匂ひてゐたり

めざめしはあかときならむしわがれし鴉のこゑのしばらくきこゆ

さまざまに思ひうつりて覚めてゐる部屋の障子に朝の陽の射す

くちなしの枝垂るる下に漂ひひほてい葵は冬を越えたり

退職願のコピーとりゆく五枚目にともに学びし友のがありぬ

町中の田の青みどろに動けるは眠り覚めたる田蛙ならむ

海苔を作り海を好みし母なりき墓のめぐりの茅花呆けつつ

黄に萌ゆる田辛子の田の面すれすれにはばたきゆきぬ田嶋なるべし

歌集「草々」

今 泉 米 子

八重櫻古りたる御苑をたもとほる花にあそびしこともなかりし

三抱へもあらむ幹黒きヒマラヤ杉ゆきて憩はむ苑の春日に

プラタナスの古木の竝木芽ぶけるを仰ぎ見返りて正門を出づ

御苑よりまかりかへれる玄関に供へものごとき一斗鐘一つ

朝々にささにしき炊きみちのくの山形なめこのみそ汁を煮る

庭の木々古りて若葉の雨の中ホトトギスのこゑコジュケイのこゑ

聲えあげて呼べど應へぬ佃煮店今津の鮓こりを買はずかへらむ

栖若葉ひるがへり吹く風見えて無人の驛に時刻ときを思はず

光なき曇の朝やはほのと棟の花はわが北の窓

つくづくと今朝眺め佇つ竹の秋すぎてととのふわが屋敷藪

歌集「はゝきくさ」II

河原静誠

砌り近くダチュラは白く垂りて咲く雨の少き夏を嘆くに
興福院の裏山道に乱れて咲く白き馬酔木を採りて帰りぬ
朝顔の黒き小さきつぶら実を園児と共に鉢に蒔きたり

お茶会を了へし娘等語り合ふつるききよう咲く寺の砌りに

砌り近く咲きはじめたる白百合を雨にぬれつつ今朝は剪りたり

園児等と今日ふる雨を話し合ふ窓辺に咲ける紫陽花の花

吾に来て幾年生うる木夕顔其の花茎の太くたくまし

移し植え花咲き始めし鹿子草砌に近しくれないゐ淡く

枯草を覆ひ囲ひし軒先のアスパラガスを今朝は摘みたり

園児らの記念に植ゑし泰山木軒をしのぎぬ中学を了へぬ

五月雨ふる夜

蒲郡 岡本八千代

ぽつぽつに五月雨ふる夜となりにつつわれは漱石の「木屑録」を書く
五月雨の降る音聞こえずただに書きし漱石のこと子規のことをも

また今年もわれに紫陽花の季来^{とき}たり今は小さき小さき蕾

われの持つ漱石の紫陽花の絵ハガキを今日より玄関に今年も飾りぬ
しみじみと泣けてくるのよ曾孫らのあどけなき写真送り来し今日は
しよぼしよぼと五月雨の降るこの朝^{あした}わが家のポストにありし小包

青笹となる竹の子伸び来たりその上に降る雫光れり

青笹となる笹幾本も伸びにつつ雫の雨の光りぞ白し

けふもまた夕焼小焼もなきままに暮れてしまへり淋しからずや

木槿庵にムクゲの白き花咲かずわれは入りゆく今日も吾独り

いつしかに君も君まで君さへも音沙汰絶えてしまひたり

今日は咲く明日は咲くかとムクゲの花白花咲くを待つのも楽し

ワイン

東京 今泉 由利

日本の古来の蚕小石丸桑の若葉の季節きたりぬ

目分量もくろみに徒ひゆきぬ出逢へたりあのことこのこと本当のこと

砂漠なる熱き風さへ蘇へるアレッポ石鹼今日バスタイム

パエー ज्याの黄の味黄の香を食ぶるとき薄紫のサフランの花

冷涼の火山性土壌に育ちしとイタリア・ワインは貝柱ソテイ

一番に弱い魚かまるごとの鰯フライは白きワインと

地球なるさまざま土質に其れ其れのぶどうは実り今宵のワイン

太古なる海の味香の潜みゐてシャブリー・ワインに我身をゆだぬ

ひとつ木に実るもあり花も咲く惜しみなくしてレモンの香ほり

ゆらゆらとバランスボールにゐるときはゆらゆらとして言の葉ゆらゆら

端午の節句

豊川 弓 谷 久 子

心づくしの柏餅届きぬ老舗の味子と楽しみぬ端午の節句

年毎の母手作りの柏餅不細工なりき楽しみなりき

蓬と菖蒲束ねて屋根に投げ上げし若き日の父我が幼なき日

背の痛み柔ぎ来りぬ痛み止めも湿布も今日は休みて見たり

もう何も出来なくなつたと嘆かれし米子奥様の歌憶ひ出す

繁りゐし庭木の枝のはらわれて我の小庭も明るくなりぬ

母の年はるかに越えたり苦労のみの一生と歌ひし母を憶ひぬ

少しづつ前のくらしに戻りたしミシンの分解掃除する

休みつつ三日かかりて編み込みのセーター一枚解き終りたり

門先まで子に誘はれて出て見たりけし一もとと花のやさしき

今年またさきがけて咲く紫陽花は我の好みの墨田の花火

新しき

豊川 内藤 志 げ

運転の免許を返えさず日に一度姉の病院に一人でゆける

病院の帰りに友の喫茶店一人の席に心しずむる

水だめの張り紙の上にボトル見ゆ少し少しとせがむ姉上

ようやくに日付と曜日の分るなり姉逝きてより二ヶ月となる

湿りよく小さき草も採りやすく藪の日蔭に一人草取り

新しき竹の緑葉深く揺れ色よき紅葉一枚二枚

晴れ渡る赤石山脈どこまでもあお一色をたのしみ歩む

今日よりは藪沿を下り田の中の石ころ踏みつ川よりの風

車庫入れに今日も音たてわが車擦りて消えぬ傷を作りぬ

頼せがまれて水分禁止の水吸はす罪人のごとく部屋を出でたり

蒟蒻の花

岡崎 林伊佐子

茎立ちて蒟蒻の花がわが畑に初めて咲きぬ奇抜きな型

自家用に育てて手作る工程はわが若き日に姑に教わる

なづな咲きいぬふぐり咲くわが畑に植えざる草も春は花咲く

散歩する田の中の道に古い人が機械に植える小さき苗を

幼な日にすげ笠かぶりて田植えする亡母の面影なつかしく思う

鍬ひとつ思いのままに動かして農仕事をする老いの安らぎ

くきやかに草汁染まる生命線たんねんに洗いスーパーに行く

日もすがら農にたづさう吾の手も小皺よりきて亡き姑に似る

天道虫ひとつ遊ばすひとときに迷路もありしや吾の指紋に

無農薬の野菜のようなわが歌も駄目になったと亡き師の言葉

ふたりを包む

豊川 安藤 和代

空に舞う鯉も幟のはためきも少なくなりて蛙遠鳴く

早緑は揺れて梅の木豆程の実はしっかりと初夏の陽に照る

風格をドンと表わし咲く牡丹朝の庭は別世界なり

柿若葉その中にして雨蛙幼き声が呼び合いており

陽の当る方へ方へと鉢移す百合に蕾の三つ見えたり

吾の詠むこの世にひとつ孫の歌かみしめかみしめ幾度も読む

祖母植えし御櫛は今大本となりて今日こそ墓に参らん

編集後記心に沁むる事多し花大根は淡きむらさき

友の文嬉しく楽しく一日に何回読みしぞ夜は更けてゆく

車いす夫との散歩若葉風緑の光りがふたりを包む

早 朝

春日井 清 澤 範 子

早朝に露ある道を歩き来て青草の中のタンポポ手折る

露含む早朝散歩は清すがし登校児に会ひたり笑みて見送る

副作用強くなりゆく吾が足は夫と歩くも歩巾小さく

ふと母を想ひ淋しくなる時は甘酒作る保温効かして

初夏の風爽やかに吾のほほなでる学童は早くも半袖を着る

初夏ほどに気温は上りぬ娘も吾も半袖のブラウス涼しかりけり

カタクリの花見頃なりと新聞に故郷香嵐溪の報道写真

菜園にて育ちし小かぶを抜きながら朝餉の味噌汁に刻みて入れぬ

さわやかに陽は注ぎつつ吾が庭の椿の新芽白く光れり

リハビリに堤防の道を歩み来て公園のブランコにゆれてみるかな

思いつくまま

大阪 伊藤 忠男

酒を避け過ぎてこのかた十五年今も妬ましビール飲む妻

毎日の発酵食品長生きとチーズ食べるも塩分に泣く

ここにきて一段二段三段と年々増える我が菓箱

怒り顔微笑み顔睨む顔国東の道に石仏ゐます

風呂の湯に手足を伸ばす五月の日小鳥の声が聞こえるくる

土曜朝おやつに釣られ来る孫のテスト問題作りおくなり

真剣に机に向かう時あればあくびしながら目をこすれるも

熱中症恐れ恐ろし日陰沿ひゆつくり歩くわが意ならずも

水無月と言えは梅雨なり水に泣く今年も異常避けられぬのか

何はさて元気ならこそ明日があるひるむ心に我れ鞭を打つ

ソラマメ

沼津 鈴木孝雄

雨水の溜に浮かぶ黄色い粉あれば花粉だ明日が恐ろし

海岸に白と紫の浜大根何処から来たのか遠慮がちに

新緑の酵素を吸いに鷺頭山木樹の谷間にウグイスの鳴く

ノースポール白い花の色あせてカモミール花咲き始めたり

半身は不随になれど懸命に花咲かさんとすグロッサラベンダー

三溪園ぐるり回りて実感す明治の方の志の高さ

横浜は時代変われど変らぬは異質文化の共栄社会

サヤエンドウ上手く実を探す要諦は遠く離れず近づき過ぎず

ソラマメの若きは空に向かい立ちやがて垂れ下り実を太らせる

ジャガイモにモザイク病が発生すしばらく休め天のお告げか

青 梅

東 京 森 岡 陽 子

花守に保存願うと託す和歌桜開花に返歌を送る

風吹く日ハンカチの木は花いっぱい蝶々の如源氏の旗の如

葉隠れて青梅並ぶ小さな実何時の間にかこんなに沢山

雀来て梅の枝葉を飛び移り青梅ポロリ落して行けり

黒塀に三味の音聞こゆ神楽坂路地の裏道石畳の道

路地の奥そろりそろりと黒猫は三味の音聞ゆる二階にあがる

東京の歌舞伎公演初めてと三人連獅子母獅子登場

風薫る杖突き歩くゆるりとおばとカフェでコーヒータム

つくづくと時の移りを感じ入る川沿い桜全部青葉に

乾杯と笑う声する居酒屋は今夜は花金プレミアムの日

五月晴れ

東京 足立晴代

ひらくと舞いて川面に花筏流れ々々ていづくに行くやら

五月晴れ眞鯉緋鯉の棚引きてあやめも色そえ端午の祝

天神様の藤の花赤き太鼓の蘭干に花房ゆれて風薫るなり

亡き母を想いて演じる母の役人の想いは夫々にあり

バラの花咲きたりとの招きありやさしき人に心より感謝せり

そば打ちの名人旦那様多勢に教えるボランティア

銀座の殿堂ビル世界に誇る日本のシンボル

九十を過ぎゆく余生幸に短歌をつくり吾は楽しむ

グルメのテレビ楽しむで食欲増進何でもおいしく

心ぞうが時々苦しい先生は九十過ぎれば未だよい方です

常に母の日

横浜 阿部 淑子

五月晴れ鳴く鶯を輪唱し我もいつしか鶯の友

朝夕に声かけくれし気づかいは常に母の日カーネーション

梅雨入りを飛びこえ気温上昇し夏日となりて露草青く

運動会「水を飲んで」と児童席見回る教師を父母は^{いたわ}労る

「コッペパンの給食だったが僕達は楽しかった」と毘寿クラス会

地水火風空

豊川 白井 信昭

三河なる七御堂のひとつなり五井の長泉寺日はうららかに

境内の静もる奥に三河守護安達藤九郎盛長の五輪塔

五輪塔下から方田三角半円田の石形に積まる
ほうえんさんかくはんえんえん

宇宙なる構成要素は五つあり下から地水火風空の順
ちみずひかぜそら

五輪塔傍にひとつ紅のトキワマンサク今を盛りと
くれない

バスツアー日帰りにして行先は源氏物語を地で行く宇治市

名古屋港一望の下に跨ぎ行く伊勢湾岸道遠く霞めり
また

平成の大修理へて平等院藤は満開に砂ずりを見ず

川近く院の境内に伝説の橋の守護神宇治の橋姫

石垣に護らる川と中の島網代木の道にいざよふ波音
あじろぎ

母の里

蒲郡 杉浦恵美子

夕暮にほんのり浮ぶ満開の庭の白薔薇命日近し

あつちの本こつちに並べてみたけれどやはりそぐわぬこんなで一日

若き頃無駄と思ひしことどもを今嬉々としてしてゐる不思議

人生に無駄なことなどあるものか控えめなりし母を想へり

常滑線名和駅懐かし幼少期夏休みには訪ひし母の里

新緑の小山に大仏御座します常滑線の聚楽園駅

北海道此処まで来しか開拓の村に一抔望郷の念

神様に抗議したりするアイヌ民族この異文化をもっと知りたい

山に入り科皮剥いで背負ひ帰り布を織るとぞアイヌの女人

滅び行くアイヌ民族知るほどにわびしさ募るもどかしいほど

紫蘭の花

豊川 山口千恵子

藤の蔓長く伸ばして花咲かせ花房長しと夫のよろこぶ

夏野菜のわづかばかりの苗を植ゑ四月の尽の日暮れてゆく

分葱のぬた喜びくれし孫のこと思ひてをりぬ今は未枯れぬ

葉桜となりて落着く桜の木青々若葉の下を歩みぬ

モチの木の葉替の落葉の溜りつつ朝々掃きとる塵取り一杯

すれ違ふ道に挨拶してゆきぬ青き小麦の穂出づる道

花畑を被ふ杉葉を鋤にかくとりあへず今はきれいになりぬ

山深く来たりし「ねむの木美術館」みどりの中に静かに在りぬ

美しき色に描きし絵の数々巡り見てゆく立ちどまりつつ

くよくよと思ひ巡らす夕べかな紫蘭の花はいつもの所に

淋しさわく心に垣根に沿ひてゆくクレマチスの花大きく咲きゐる

庭の雑草

豊川 夏目勝弘

数坪の庭はこの春てん点と種ばら播きしごとキキョウソウの芽生え
腕の足の出来物を治しぐれにしドクダミよ今は庭の雑草となる

繁茂せしドクダミ憎しと除草剤かけて絶えたり三年の日月

生薬は草木によりて作られる畑の庭の草草は雑草

スミレをば見ずになりて久しかり散歩す山道も草なき舗装路

覚えしはスミレタンポポレンゲソウアメリカの付く草草多し

数坪に生いる雑草を枯やし除草剤を使ひしこの愚かさを知る

庭の草取りある顔にカタバミの飛び散る種子の命の力

キキョウソウのみを残しぬそのなかのピンクの小さきユウゲシヨウの花
植物がなければ人は生きてはゆけぬ思ひを込めて時には枯らす

歌集 「夢のつづき」

水上 信子

星ひとつ流れて地球に降り立てり薔薇の花持つ王子に会いたし

眠られぬままに眼を閉じ闇のなか夢に落ちゆくその時を待つ

移りゆく季節を虫の声に知るふと気がつけば足元に鳴く

足細き若者に席ゆずられて深夜の電車夢うつつなり

夜の道を猫がのそりと横切りて後ろの足音なにやら怖し

幾重にも山かさなりて国ありき緑に染まるブータン旅情

緑のみで織り上げられし緞帳のごとき田畑の山頂へ伸ぶ

山国の山なりに行く国道には標識もなし看板もなし

国道にのどかに牛が草食めり急ぎすぎない開発のよし

ブータンのりんご小さくころろと赤くかわゆく幼子のごと

「歴代天皇御製歌」(七十六)

貫名海屋資料館

「桃園天皇」第百十六代・在位一七四七年(七歳)―一七六二年(二十二歳)

桃園天皇は、櫻町天皇の第一皇子。桃園天皇十八歳、宝暦八年(一七五八)、京都にいた尊皇論者らが、江戸幕府によって処罰された「宝暦事件」が発生。

「列聖全集」に四六二首の和歌を残された。賀茂真淵が「萬葉考」などを著わし、国学史上に業績を残した。杉田玄白が西洋外科医師を唱え、「解体新書」が出版された。

のどかなるわが九重のさくら花さかり久しく見るぞうれしき

櫻(十歳)

神代より世々にかはらで君と臣の道すなほなる國はわがくに

祝(十八歳)

萬代もたえずさかゆる道なれやあまつ日嗣にやまと言の葉

寄道祝(十八歳)

にぎはふと開くぞうれしき小山田の四方^{よも}にかずそふ民の家々

田家(二十一歳)

『いっよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

鬪^く港の石畳歩む一歩づつ澄みし水底に大き^{えひ}鱒一匹

眼科医のかほそき声に耳すますイネかヒノキかその先の語に

山崎 俊子

捨てがたき思ひをひとつ持ちてゆく潮騒きこゆ岬のはてに
はてしなく耀ふけふの海の碧ゆく船もなくただただ青し

三田 美奈子

散る花に面影重ね逝きし人を偲^{さむ}ぶが如き寒雨^{あめ}の降る
軒越しに木蓮咲きて主を待つ郵便受けには便り溢れど

水野 絹子

わが池の冬の間を隠れぬし大きな赤色の魚らしきが出づ
穏やかな春の日差しのその先の対岸の伊良湖くつきりと見ゆ

牧原 規恵

桜舞ふ園地を無心に駆ける孫この穏やかさが永久にと願ふ
去年の春息子のくれし紫陽花に花芽の七つ見付けて嬉し

稲吉 友江

端と端きつちり合はせ毛布たたむ父の仕草の今朝また浮かぶ

「これから笑顔忘れず」と真央ちゃんは終止符うちたりこの春の宵

鈴木美耶子

地下鉄に乗りて幼と出掛けたり親には言えぬ秘密あるらしも

一週間我は幼らと過ごしたり赤きチューリップペランダに咲く

吉見幸子

ひめゆりの塔の前にはガマなる壕ゴツゴツと深く煤ける入口

沖縄に米軍上陸は四月一日それも知らずに今日は来たれり

牧原正枝

賑やかな子等の声消え静かなり公園に一人吾ブランコを漕ぐ

花冷えの雨となりたる日曜日狭庭に雀が何やら啄む

石田文子

桜さくらひとり歩きつ公園は紅桃色^{くれなる}白色ハーモニ

桜さく小さき苗木の公園に家族にて寄りしかの日よ遠く

森厚子

現代学生百人一首

東洋大学

3時起き搾乳をしてしばれる手牛のぬくもり私のカイロ

北海道帯広農業高等学校二年 安藤 朱^{しゅ}生^う

愛猫に癒しを求め抱きつくと母も同じか私に抱きつく

北海道帯広農業高等学校二年 廣瀬 茉^ま優^ゆ

トラクター輝きながら乗りこなす小さな父の大きな背を追う

北海道帯広農業高等学校二年 福地 一^{かず}貴^き

行つて来ます一人で初めて新幹線一人前の技術者目指して

青森県立八戸工業高等学校二年 野呂 健太

制服の縫い目見つけて今思う六年間の母の愛情

青森県立八戸工業高等学校三年 小澤 研二

演じてる自分の心とかくれんぼ誰か私を見つけてほしい

盛岡誠桜高等学校二年 宇田詩織

「おはよう」と君のテノールが心地よく響く教室背筋が伸びる

秋田県立秋田西高等学校二年 杉本 椎

「大丈夫」母に言われた三文字を胸に抱いていざ面接へ

山形県立酒田光陵高等学校三年 太田 双葉

童謡 「笑顔のスキップ」

高橋育郎 作詩

ニコニコ笑顔は いつみてもいいな

タンタンたんぽぽ わたげがとんだ

スキップしてる子 もつともつとはねろ

春風そよそよ ひらひらちようちよ

空も青いね 笑顔のスキップ

あの子の笑顔は かわいくていいな

お日さまニコニコ ひまわり咲いた

あつちもこつちも スキップランラン

ウサギがはねてる みんなもはねる

お花が笑った スキップピョンピョン

あかるい笑顔の スキップランラン

笑顔のスキップ 元気でいいな

「歴代天皇御製歌」(七十七)

貫名海屋資料館

「後櫻町天皇」第百十七代・女帝・在位一七六二年(二十三歳)―一七七二年(三十一歳)

後櫻町天皇は、櫻町天皇の第二皇女。この御代「明和事件」、勤皇学者・山縣大貳の家に寄宿し、藤井右門が「柳子新論」を著し、幕府を震撼とさせた。この御代には、朝鮮や琉球からの使者が到来。

絶えせじなむべすなほなる教をも代々につたふる言の葉の道

寄道祝言(三十八歳)

まもれなほ神のめぐみにつたへきて明暮あふぐことの葉の道

あぐれ

住吉社御法楽(二十八歳)

あめつちとともにつきせぬ敷島の道は神代のひかりなるらし

寄道祝(三十九歳)

こしかたもまた行末も思ふぞよひとりねざめのあかつきの床

暁(五十五歳)

ならひつゝ千代も契らむ呉竹のなほきすがたを人のこゝろに

竹契か週年(七十三歳)

『俳句』

老鶯や竹やぶに雨降りしきる

松 本 周 二

あさなさな野のをちこちの雉子かな

新緑や老いも若きも皆走る

ナイターやさよならの球転々と

柳 田 皓 一

ナイターやビール売子の昇り降り

新緑や葉脈淡く透けみゆる

暁はまだ雲の中遠郭公

山 元 正 規

新緑に雨のたつぷり降る日かな

さびしめば郭公の声ひびきけり

新緑の影揺れ動く鏡池

山 迫 京 子

新緑に吞まるごとく子等の列

ナイターや歓声のしてホームラン

葉隠れた並ぶ小粒の実梅かな

森 岡 陽 子

撒収の声喰がるる祭りあと

天空と名の付く庭や青嵐

ナイターや一瞬静まるホームラン

田 中 清 秀

ナイターの試合帰りのしやがれ声

若葉風白石多き水無川

うつすらと額の汗や初夏の風
クールビズ白きYシャツ眩しかり
玄関に鎧兜の威厳かな

重野善恵

其れ其れの匂ひ放てり新樹林
毘沙門を守る寅毘沙夏日向
雛罌粟やちいさく細く坊主立て

今泉由利

大き弧を描く列車や花りんご
芍薬や江戸期のままの町名で
薫風や旧弘高に自治ありと

今泉如雲

天地のあわいの三春滝桜

植村公女

海老蔵の大らかな見得夏きざす
かたくりのそよぎて風の起るらし

「一茶名句集」(大正十一年一月廿五日発行)

散花に佛とも法ともしらぬかな
咲く花の中にうごめく衆生かな
なまけるや明日も月あり花ありと
こちとらは花が咲かうが咲くまいが
大葉小菜食ふ側から花咲きぬ
身一つをひたと苦になる暑かな

かさね吟行会

「神楽坂界限」 五月

田中清秀

黒塀の食事処や庭薄暑

古典めく茶屋の名札や風薫る

山門の茶屋に浅黄の夏暖簾

さち子

清秀

素山

季語で言えば初夏とか薄暑の頃、今回も晴天に恵まれ清々しい吟行会となった。訪ねたのは新宿区の神楽坂、この地は古くは牛込と呼ばれ善國寺の毘沙門天を中心にお茶屋が軒を連ね花街として江戸後期から発展して来た。現在では細い横丁や路地の石畳、急な階段と老舗の料亭などがあり江戸情緒を今に残すお洒落な観光地となっている。

平成二十九年五月十二日十一時にJR飯田橋駅改札に集合し、神楽坂下から神楽坂通りを歩き始める。通りの左右にはテレビのロケや写真撮影の舞台に使われた横丁や小路が沢山並んでいる。例えば、芸者さんの取次場所の見番のあった「芸者小路」、お忍びの客が横に入ると見つかりにくい「かくれんぼ横丁」、その昔本多家の大きな屋敷があった「本多横丁」、小さな飲食店が密集している「神楽小路」などである。粋な黒塀に狭い路地、大小異形の石畳と石段、まことに花街情緒豊かである。

神楽坂通りを上りきった所に朱色の門と朱色の本堂の立派な善國寺がある。本尊は四方の北を守るインドの神様毘沙門天で、古くからどんな願いも叶えてくれる「毘沙門様」として地元で信仰されている。また、本堂前には厳めしい顔付きのトラの化身像が狛犬に代わって安置されていた、これも珍しい。

インドより来られし神に樟若葉

虎二匹あうんの姿夏の寺

由利

しのぶ

江戸しぐさとは、濡れないようにすれ違う「傘かしげ」、脚を踏まれてもうかつでしと謝る「うかつあやまり」、道の真ん中を歩かずに自分は三割にする「七三の道」など日本人の美徳の象徴のような立振舞のことを言うらしい。ただ、江戸時代から実在したという事実はなく口伝で受け継がれたもので歴史的根拠はない。この神楽坂界限を散策するとそんな昔からの芸者さんのしとやかな仕草が思い浮かぶ。偶然にも黒塀の狭い辻から芸者さんの

手習いなのか三味線の音が聞こえてきた。

涼しさや三味の音にふと佇みぬ

礼子

三味の音の聞こゆる路地や風薫る

陽子

夏に入る見番小路三味の音

京子

神楽坂の芸者さんは明治の最盛期には七百名が在籍していたといわれるが、現在では三十名と少ない。神楽坂おどりと各種の祭礼に参加し地元との交流を深めている。高度で多彩な芸を持ち様々な教養を身につけた芸者さんは詩歌管弦、書道や茶道などの町人文化の継承者でもある。また、この頃は観光会社のお茶屋体験ツアーがあり外国人にも人気があるらしい。

葉桜やしだれしだれて葉の重し

皓一

石段は和服の歩幅黒日傘

正規

神楽坂には猫が多いという。商店街の黒猫「おやびん」、みちくさ横丁の「のら猫珠」、ほかにも「ももちゃん」「フウちゃん」などが観光ガイドのサイトにのっている。ただ、なんで野良猫がこんなに多いのかは不明である。

神楽坂の楽しみとしては二月に毘沙門天の節分豆ま

き、三月のお花見、4月の神楽坂をどり、夏はホオズキ市の神楽坂まつりなど四季それぞれに催し物がある。伝統ある楽しい行事が地域の人びとの努力で継承されている。何れの機会に、もう一度ゆっくりと訪ねて来たいものである。

句会場は少し離れていたが神楽坂らしい日本家屋の一軒家を使った和食処「和らく」で行われた。部屋はテーブル席ながら落ち着きのある個室で句会には最適、時間の許す限りゆっくり使わせて頂いた。

いつもの通り囁目三句出しの四句選、いくつもの名句が揃い盛会の内に句会はお開きとなった。

■かさね吟行会■

日時 七月十四日（金）

場所 哲学堂公園 食事の予定あり

集合 中野駅北口改札口11時集合

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（六三）

丸山 酔宵子

フルコースを楽しませてくれた。

一方、日本海を隔てた16日日曜日の平城（ピョンヤン）では、金日成花展（特別なラン種）を愛でる人々や晴れ渡った青空の日曜日、遊園地の流れるプールで楽しそうにはしゃいでいる子供たちが映し出されていた。

イエス・キリストがゴルゴダの丘で十字架につけられ、葬られ、三日目に甦ったことを記念するのが復活祭（イースター）。「春分の日の後の最初の満月から数えて最初の日曜日」と定められていて、今年は4月16日。昨年は3月27日であったから、20日も早い。通年では、関東地方の桜の開花が宣言される頃で、まだまだ寒さの厳しいころである。

今年の桜は3月末ごろの開花宣言以来、大雨も強風もなく、蕾（つぼみ）から三分咲き、七分咲きと毎日着実に満開に向けて咲き続け、そして赤い蕊（しべ）が降り、若葉の青さが透けて見える葉桜に至るまで、大いに桜の

そんないつもの平穏な日々の中、北朝鮮の核・ミサイル開発をめぐる緊張が高まり、巨大な原子力空母「カール・ビンソン」が率いる空母打撃群が朝鮮半島に配備されつつある。方（かた）や北朝鮮では、建国指導者金日成主席の誕生日を祝う太陽節4月15日の大軍事パレードが行われ、翌早朝、復活祭当日にミサイルを発射、失敗との報道がなされた。訪韓中のペンス副大統領は「北朝鮮はトランプ大統領の力と決意を試すべきではない」と警告するに至り、将にチキンレースも大団円に至った様相である。

チキンレースとは、ジェームス・ディーンの「理由な

き反抗」の度胸試しのカーレースが有名で、壁や崖に全速力でどちらがブレーキを踏まずにいられるかを競うゲームのことで、先にブレーキを踏んだ方をチキン臆病者と呼ぶのである。

トランプも図体ばかりでかく、品性の無い胆力不足は否めない。金正恩も幼児的変質的扇動者で決して油断は禁物である。翻って、戦前の日本を考えると、欧米の日本への見方は、現在の北朝鮮あるいはそれ以上の恐怖と思われていたのであろうか。日本人としてそのようには考えたくないが、西欧列強に対し忽然と出現した日本は、「黄禍」として異常に思われたことは歴史の事実であろう。その列強に対し無謀にも挑戦し、広島、長崎の原爆の洗礼を受け悲惨な結果を招いたことは忘れてはならない。

現在の日本の北朝鮮に対する姿勢は、アメリカとの連携での圧力一辺倒に偏っているが、今こそ日本の過去の

経験を生かして、北朝鮮への助言を何らかの手段で起こすべきであろう。事実、パチンコ収益の数百億が今でも北朝鮮に送金されているのも事実なので、アントニオ猪木でも使つてウルトラC極秘外交を展開してもらいたいものである。

復活祭と言えばカラフルに彩られたイースターエッグ。キリストが十字架につけられ三日目に復活したことが、ヒヨコが卵の殻を破って蘇る姿を象徴しているが、どちらもチキン（臆病者）で結構で、双方ともに、只管（ひたすら）、美味しい卵を産むことに専念してもらいたいものだ。

葉桜やチキンレースは北の果て

酔宵子

本からのあれこれ(20)

米田文彦

「時の流れ 1」

三津七湊という言葉がある。室町時代末の書物に記されている日本の十大港湾のことであり、三津は安濃津(三重県津)、博多津、堺津または坊津(鹿児島県)であり、七湊は三国湊(福井県)、元吉湊(石川県)、和島湊(石川県)、岩瀬湊(富山県)、今町湊(新潟県)、土崎湊(秋田県)、十三湊(青森県)のことである。合計十の湊の半分以上は日本海にあり、当時の水運の主流であったことがわかる。

江戸時代後半には造船技術も発達し、和船ではあっても五百石、千石という大型船が潮流と風を利用して北海道にまで往来するようになってくる。関西から瀬戸内海を通過して北海道にまでとなると、いわゆる北前船といったほうが分かりやすい。北海道へは米を、帰りは昆布やニシンというのが主な物産だが、実は商品もいろいろ、海運も多彩、途中の湊と湊を往復するだけの船もあり、それだけ湊も栄えるのである。

北前船という言い方は関西から見ても、江戸湾からとれた漁獲を江戸前というのと相応する。

日本海の各地方ではそれぞれ独自の言い方がされていたようで、例えば富山ではバイ船と言った。この呼称の根拠は各説あるが、いずれにしても当時の遠隔地間の流通、物価差を生かした商いであり、大海に出て遠い地へ行く勇氣と商才に長けた者が力を蓄える世界だった。時代でいえば江戸末期から、最盛期は明治になってからと明らかにされている。

富山岩瀬でバイ船の仕事を始めたその家の初代は、当然ながら既にある廻船問屋で商いを習う。独立しても資源豊かな富山湾内、せいぜい能登半島辺りまでの近場の商売から始めたに違いない。やがて歴史は進み、北海道にロシア船が来航する時勢になってくる。幕府は北海道の守りを強化するため松前藩を支援し、人も多く移住させ、必然的に食料需要が増えてくるのだ。

この時期、寒冷のため北海道で米は獲れない。北陸から米、藁製品を送り、帰りには魚肥(雑魚の乾燥品)を持ち帰る。ということ、一山ということの家の看板業種

は「肥料商」なのである。海運業ではない。つまり米と肥料と両方の産地直送商売であり現物商売だった。農家との売掛金は秋の米代金で相殺される。この家にとっても農家にとってもお互いに大事なお客様、取引先であつた。

そして、バイ船の商いは船頭の働きが肝要である。つまり、船主の決めた数量・値段とは更に幅を持つて自由裁量の権利があつた。現地の状況により船頭が商売の値決めなどを行う権限を持っていたのであり、才覚により船頭自身の利とすることが認められていた。ホマチ商いという。湊の近くまで行つていても条件が有利になる状況を待つ、とでもいう意味であろうか。

ここでも消費者と生産者、船主と船頭はお互いにお客様ともいえた。

そして時代は明治へ。急速に鉄道が各地に張り巡らされてゆくが、米を大量に運搬するにはまだまだ海運が有利だった。しかし、当時の当主である三代目（女性、サトという）は事業柿宇内の中で改革にチャレンジしている。カムチャッカへの遠洋漁業、大阪への商圏拡大、売

薬の試行、などの記録がある。しかしなかなか結実は遠かった。また、この人は大正四年に女性として珍しい選挙権の行使をしている。そのことが新聞に名前入りで載るほどであつた。

また、この三代目が活躍した時代、明治三十年代から大正なのだが、NHK数年前の朝ドラ「アサが来た」の時代であり、主人公・広岡浅子、大隈重信夫人の綾子が躍動した時代と重なる。目を見張るような活躍をする女性が出てきた、そういう時代であつた。

四代目は養子として入った人なのだが、商売は益々順調、温厚な人柄で人々からの信頼も厚く、町の発展に尽力して湊の大規模改修、運河整備、現在の富山市内を走るライトレールの基となる路面電車敷設、などに私財を投じて完成させた。

また、三代目と相談しつつ時代を見て薬品業への転換をも図つた。その一環かもしれない、仏教界からの賓客・浄土真宗婦人会長の九条武子や野党期の大隈重信を招じて接待した資料などを残している。

しかしやがて戦雲が濃くなってくる。

ある自然科学者の手記(62) 大橋望彦

オマケの人生で、何か従来と変わった所があるのだろうか。それは、決して急に変わるものではなかった。しかし、それは確実に変わるものだと思う。その一つには、今生きているが、何時再発して死ぬかもしれないという切迫感が常に纏わりついてくる。しかもそれは、周囲の人たちも同じ感情を無意識であつたとしても持っているのである。従つて、重要なポストには永くは、置いとけないし、長期の計画へ参画することに躊躇することは本人ならずとも当然と思える。そうなると、どうしても窓際族扱いとされてしまう。転職するには条件が難し過ぎる。そこで考えることは、この環境からの逸脱である。真剣に「田舎暮らし」を考え始めたのもその現われである。それに定年退官が一つの契機を作つた。さらに、もう一つの変つたことというと、妙に物事を達観してしまふようになった。いつ死んでも仕方が無い、それがオマケなのだ、という気持ちの現われなのだろうか。「職業・仕事のこと」、「男女間の問題」、「田舎暮らしの問題」、「経済に関すること」等々に係わること全てに関

して云えるように思われる。

大学院を出てからは、研究所での生活しかなかった。これは、あまり多くの人が経験することではなく、むしろ稀有のケースと考えたほうが良いが、正直な話、何と我俣し放題の生活であつたろうか、それがあたかも特権のごとく感じていたのは浅はかとしか云い様が無い。しかし、研究というものは、就労時間、経済性、思想、計画、全てに於いて自由の一言に尽きる。それを外から規制して好い研究結果は生まれる筈も無い。最近の研究所の中には、この自由が何と無くなつてしまつたのか、残念でたまらない。だが、間違つては困る。この自由は、全てのことを、自分が規制していることなのである。言い換えれば、全てのことは最後の成果に関わっているのである。だらしなく研究生活をただ送つていても、決して良い成果は生まれてこないことだけは明確である。結局、我俣のし放題という生活は、研究のために自分の生活を如何に合わせるかという出来るかという我儘であつたのである。だから、細君にまで、まるで自分の周りを世界が回っているように思つているのでしようと言われてしまふのである。

研究生活とは、研究する場が必要である。どんな良い

仕事をしようと焦っても、その研究に必要な器具機材等が揃っていないれば期待する成果は得られない。今は実証科学の世界である。特に医・理・工・薬・農学系の研究ではどんな立派な仮説を立てても、実証されなければ無に等しい。更にまた、実験をしていなければ、従来から知られている事実とは全く異なり、予想もしなかった新事実を発見する機会も無くなってしまうのである。実験をしていて、予想外の結果が出てきたときには、普通の人ならガツカリするだろうが、研究しているものにとっては、またとない研究材料の到来と考えるのもそんなに大げさな事ではないのである。

自分が今考えて、他の人がまだそのような考え方をしていないならば、現在真実であると信じている事柄も、場合によっては今考えたことから導かれ、これまでの根拠となつていふことはまったく違う結論からしてみると、その事柄自体が真実ではなくなるかもしれない。そうであるならば、研究者たるものは、その考え方を立証して、今まで真実であると考えられていたことを明確に否定しなければならぬ。そして、新しい真実が見つかった以上、各方面でどのような事柄の解釈が修正されねばならないかの作業も必要となってくる。その

作業は、おそらく、研究者にとってこの上も無く愉快な仕事となるだろう。これは、研究生活の至福のときといえるであろう。Prof. Teminはこの経験者であるし、事実その喜びようは大変なものであった。たしかに、それでノーベル賞を貰ってしまった。

研究者は、ロマンティストであると良く聞く。僕もそう思うことがあるが、実際には大変違っている。研究者は想像力に長けていなければならないし、執拗なまでも論理性を大事にする。ロマンティックな夢のような事柄であっても、もし真実として大切な事柄である限り、それを立証しなければならない。基礎からきっちりとした論理構築がなされ、実験事実の積み重ねからはつきりと実証すれば、立派な研究者といえる。しかし、論理構築も出来ず、実証が出来なければ、ただのロマンティストで終わってしまう。ただし、立証は、必ずしも実験を自らしなくても、信頼の置ける学術雑誌等で既に周知の事実となつている事柄は、その引用によって代えることが出来る。ときとして、ご都合本位の文献引用ばかりでは、逆に真実性を疑われても致し方ない。そこで必ずDISCUSSION(吟味)が必要となる。ここで論理性が評価される。

絹の話 (80)

「アトリエテレビ」 今 泉 雅 勝

「絹の予期せぬ効用」

絹のトランクス、ふんどし

昨今絹の需要はアウターとしてお洒落に着るものから絹の機能性を謳ったシルクインナーや腹巻、シーツ等の需要が女性を中心に増えています。

特に絹のトランクスやふんどしが男性の間で秘かなブームになりつつあります。

それは湿度と温度が上がる股下の陰部の周辺が絹の保温、放湿、保湿、放湿、抗菌性等の効果により、人体機能に適した状態を維持してくれるので、「さわやかで気持ちが良い」というものです。

男性の睾丸は体温より2〜3度低いのが通常で、暑い時は自動的にダラリと表面積を広げて、ラジエターの様に放熱し、寒い時は収縮して放熱を防いでいます。身体全体でも寒い時ちこまるのと同じですが、睾丸の場合には顕著です。

ブリーフの場合はピタリ股に沿うので、睾丸が肌に密着する結果になり、高温多湿状態が続いて、睾丸の大

切な生理機能である精子造成作用が抑制されるのではないかと言われるようになりました。

ヨーロッパなどではブリーフを男性の避妊パンツなどと揶揄する人もいるそうです。

男性の股下は常に風通しよくしておかないと子宝にも恵まれない可能性が大きくなると云う事です。

子宝に恵まれないことなく悩んでいる人は世間到大勢いますが、こんな身近なことに不妊の原因があるとはなかなか思いつきません。

勿論、いんきん田虫予防にも効果が有ります。

最近、男性が軟弱になって来たときよくいわれますが、細身のズボンはき、化繊混のブリーフでは股下の風通しが悪くて男性本来の「男気」も消沈してしまうと思われまます。最も風通し良いのは絹のフンドシではないでしょうか？

新たな民族移動が起こりつつあるこれからの世界は民族同士の生き残りをかけた長期の生存競争の時代に入ると思われます。そんな時代を生き抜く為には、より固い物を食べて顎の発達を促し、頭脳の発達と忍耐力を増進させ、睾丸にまで風を入れて凍々しい男達を育てる事にも配慮しなければならぬでしょう。

アメリカの奇病の赤ちゃん、絹に救われる

今から四十数年前アメリカのアイダボ州の生後2ヶ月の赤ちゃんがちよつとした摩擦でも全身火ぶくれの様になり、過去百年間に3例しかない奇病にかかりました。

その対策は絹100%の物を着せるより他に対処方法がないという事でしたが、その町では絹など入手出来なく困っていると云う事を知った日本の商社マンが、日本から白羽二重を取り寄せて送ったところ、それを着た赤ちゃんはみるみる良くなり、危機を脱する事が出来たという話しが今日まで伝えられています。

その様な話を「おまじない」とか「迷信」だという人がいますが、絹には今日の医学でも検証されない驚くべき効果が沢山有るのです。

絹の肌着、南極で大活躍

零下50℃、風速70mにもなる南極の気温は北極の比ではないといわれます。

「南極物語」の映画撮影に南極入りしたスタッフは絹の下着を持参し、その暖かさに感激したそうです。

南極でも撮影で活発に活動すれば当然発汗作用が活発になります、その汗は不断に身体から気化熱を奪い続け、寒さに耐えられなくなります。

ところが絹は水分の気化が綿の3倍近くも早く、体から気化熱を奪う時間が短いので放熱を抑制し、僅かな湿度が加わると微量な発熱をして、絹の繊維の非結晶部分と繊維間の空気が断熱効果を發揮しますので、暑くなるほどではありませんが、体温維持に役立ちます。

南極では大変暖かく感じたのでしょう。

絹の下着は安物の方が身を守る

絹には大別して、長繊維として何個かの繭から揚げられた生糸と、それらを作る時残ったケバやキビソ、屑糸などで作られる絹紡糸(つむぎ糸)の2種類があります。絹紡糸は絹特有の艶や滑らかさは生糸にはありませんが、絹の持つ多くの機能性が除去されずに残されていて、糸間にも多くの空気を含み保温効果も高く、屑糸に含まれる多くの水親基が汗の吸収を活発にし、抗菌性にも優れていて、どんな繊維より軽く、持ち運びにも便利ですよ。極地、冬山などには命を守る下着として利用されるとよいと思います。入院時などには安価な絹紡糸の木綿タツチのパジャマをお薦めします。

災害避難の時も絹物を1枚持つて避難して下さい。救援の届く迄の僅かな過酷な時間に身を守ってくれます。

短歌に詠まれた茂吉

―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

七十回

「月虹」 鯨島 満

二十 扇畑忠雄 1

本項は、本誌二〇一四年十二月号「扇畑忠雄」を再構成、増補するものである。すなわち、「アララギ」「群山」等の雑誌や合同歌集等に発表されたまま歌集に収録されていなかった作品（『短歌作品集成』上・中・下）を資料として追加、構成を改め補筆するものである。

昭和六年^わ壮^わかりし茂吉に会ひし日は故里金瓶をわが
知らざりき 昭和四十三年

正目^まにてわが知る茂吉昭和六年学生の日より敗戦の
のちも 平成五年

昭和六年よりの縁^えかみ葬りに侍りし寒き日を思ふな
り 平成十四年

赤き舌出し給ふ癖もわが知りて親しみしや恐れしや
学生^{がくせい}のころ 同

読み込まれている「昭和六年」は作者十九歳の時である。京都大学の学生であった作者はこの年アララギに入

会、同郷の中村憲吉に師事することになった。

一首目は山形県金瓶の茂吉の墓を詣でた時の作であり学生^{がくせい}の頃は茂吉の故郷が金瓶であることはまだ知らなかったと詠む。二首目は、茂吉とは学生^{がくせい}の頃に会って以来敗戦後も会ってきたとその関係の長さを詠んでいる。三首目は昭和二十八年二月の茂吉の葬儀に参ったのは昭和六年からの縁であったというのである。

君は珈琲か紅茶かと問ひましき憲吉見舞ひの旅のま
にまに 平成十四年

伴ひて茂吉先生と泊りたる紅葉谷の宿忘れざるべし
昭和六十年

昭和八年君^{きみ}壮^わんなりき学生^{がくせい}の吾に写生の歌を説きつ
つ 同

五十幾年まへの思ひ出まざまざと君^{きみ}の声音^{こゝろ}のよみが
へるべく 同

一首目は、昭和九年五月に亡くなる憲吉を見舞った時のことを回想している。広島の憲吉のもとに至るまでの道中のことであろう。他の三首には「宮島にて」の題がある。三首目に「昭和八年」とあるので一首目の旅、つまり「憲吉見舞ひ」の時のことであろう。この見舞いには土屋文明、岡麓と共に行ったと茂吉は日記に記しており、まだ学生^{がくせい}の作者のことは記すほどのことではなかつ

たのであろう。憲吉を見舞った茂吉は次のように歌を残している。

しづかなる浜にいたづき養ふと君ひたすらに臥していませり

『白桃』昭和八年

病みこやり瘦せたる君を相見つつ何より先に話すべきかも

友のこと心におもひ寝つかれず幾時か聞く海どりのこ

懇^{うづた}ふる言^{こと}さへもなき静かさを君は保ちてかい細りけり

白秋の葬りに君に伴ひき仙台へ赴任の前の日にして

平成十年

京都より仙台に移るみちすがら東京に病院に茂吉を訪ひし

昭和五十二年

白秋の葬りに茂吉に伴ひきそれよりみちのくの国に入りたり

作者は昭和十七年に旧制第二高等学校に教員として着任、のち東北大学教授になるが、そのため一旦東京に立ちより茂吉を訪ねる。それを詠んだのが二首目である。そして仙台に行く前日に北原白秋の葬儀があり、茂吉に従って参列したというのが一、三首目である。一首目に「君に伴ひき」と、茂吉に従ったと言っているが、昭和九年に憲吉の死に遭って以降は、(この時文明がいたと

すればの話だが) 師事していた文明に従ったという方が適切かもしれない。

癒えたまひ生命しづけき君ゆゑに暗きに見ゆる沼も身に沁む

『北西風』昭和二十一年

立ち上りよろめきてシャツ着給ふを思ひゆらぎてわが目守るのみ

住む国を隣りて常にたのみにき今日は正^{まぎら}目に最上川と君と

「卸して熱き湯をかけ給へ」立ちて手づからカリンの実を賜ふ

香^{かぐ}はしきカリンの木の実灯に置きてゆたけき君と相居ることし

疎開先の金瓶から敗戦後に大石田に移居していた茂吉を訪ねた時の歌である。一首目はこの年患った肋膜炎が癒えたことをしみじみと喜ぶというのである。三首目は隣県に住む作者は何かと心強い思いを抱いてきたが、今日は直接教えを乞うことだというのである。五首目は、茂吉から「卸して熱き湯をかけ給へ」といただいた黄熟して「香はしきカリン」を夜の食卓に置くと茂吉と共にいるような気持ちになるというのである。

楽しい時間 56

山本紀久雄

2017年5月31日

三遊亭円朝像…その五

今は落語ブームであるといわれている。その通りと思って、今までいろいろと述べてきたが、落語家・立川談四樓が「本当に落語ブーム？」（日経新聞2017年4月30日）と疑問を呈し、ブームではあるが「偏ったブーム」であると述べている。その記事を要約してみると以下のようなになる。

①東京の落語家は約500人、そのうち300人以上が真打で、仕事の奪い合いは熾烈を極めるようだが、実は、一部の落語家だけが忙しく、「オレはヒマだぞ」と宣言する落語家も数多くいる。

②東京には「落語協会」「落語芸術協会」「円楽門会」「立川流」と4団体あつて、定席の「浅草演芸ホール」「鈴木演芸場」「新宿末広亭」「池袋演芸場」には落語協会から脱退した「円楽門会」「立川流」は出られないので、その代わりに地域寄席に向かうことになる。

③地域寄席とは「お寺の本堂」「神社の参集殿」「蕎麦屋」「寿司屋」「居酒屋」「公民館」「民家」等で、首都圏だけで月間1000を超す公演数、そこに「円楽門会」「立川流」に加えて、定席からあぶれた真打と、定席に高座を与えられない二つ目が参入する。

④したがって、地域寄席に限っては飽和状態であり落語ブームといえる。

この記事を裏付けるのが、先月お伝えした4月11日の、めぐ

ろパーシモンホールの「気になる三人かい・柳家喬太郎・桃月庵白酒・春風亭之輔」であつて、1200席もの大ホールが満席となつて、地域寄席は落語ブームであると判断できる。

さらに、この3人はいずれも「落語協会」所属であり、人気者だから、当然に定席での公演もあるわけで、あぶれた真打ではない。それなのに地域寄席に進出しているのである。

だから、立川談四樓の記事にあるように、「一部の落語家だけが忙しく、『オレはヒマだぞ』と宣言する落語家も数多くいる」ということになるのだろう。

特に、春風亭之輔にいたつては、年間3500日、およそ900席もの高座に立ち、落語界多いとNHKの「プロフェッショナル」が伝えるように、「一部の落語家だけが忙しい」のが実態であることがわかったが、もう少し落語界の実情を見てみよう。5月13日（土）の雨の日に上野の定席「鈴木演芸場」へ行つてみた。定席だから混んでいるだろうと早めに入りに行きチケットを求めようとしたら、今日は大丈夫ですよとの答え。要するに空いているのである。

ではと松坂屋へ行き、地下で弁当を買い、コンビニでビールと日本酒を手当てし、「鈴木演芸場」内に入ると「ガラ」として回る。開演時間の17時30分なつても、入りは三割くらいしかない。団体客が20名ほど入っていたが、これがいなければ閑古鳥状態である。

一日だけの客席で判断するのは危険とは思ふが、これでは定席経営も厳しいのではないかと推察する。そこで、別の定席「浅草演芸ホール」に近く行ってみようと思つていところ。「浅草演芸ホール」も空いていたら、定席が地域寄席に負けているといえるだろう。

この地域寄席なるもの、三遊亭円朝が活躍した幕末期にはな

かつたはずで、安政元年（1854）ペリー再来航、日米和親条約締結、安政5年（1858）井伊直弼大老、日米修好条約調印と安政の大獄、安政7年（1860）3月桜田門外の変等と騒然とした世相が続いたが、江戸庶民生活は事件とは関係なく、「夜と昼朝」とに落ちる日千両と川柳でうたわれた通り、夜は吉原遊郭、昼は三座（中村座、市村座、森田屋）、朝は日本橋の魚河岸、この三ヶ所は一日に千両の金が落ちるというほどの賑わいを見せていた。

また、安政度の「江戸都合荒増勘定」にも、江戸には「軍談の席220軒、はなしの席272軒」と演芸場が多く盛んであったと伝えている（参照『新版三遊亭円朝』永井啓夫著）。

しかし、さすがに慶應4年（1868）1月の鳥羽伏見の戦いから、慶喜追討令、江戸開城、諸大名の帰国等が続き、5月15日の旧幕府軍上野彰義隊への攻撃がおこなわれる頃になると、江戸の街は騒然となり、江戸の治安状態は二気に険悪となり、定席である芝居寄席への客足もすっかり寂れていった。

それでも人気者の円朝は、上野戦争の当日、日本橋瀬戸物町（中央区日本橋室町）の寄席・伊勢本に出動しようと思いがけながら、官軍の兵によって浅草見附が閉ざされ、通行できず休席し、家に戻るという不穏な雰囲気になった。

ここで話が突然変わるが、先日、千葉市在住の潮見佳世乃さんから一通の手紙が届いた。《今回は、父が歌物語創作40年の記念に書きました作品「山岡鉄舟貧乏噺し」に初挑戦！鉄舟の極貧青春時代を語ります。江戸情緒溢れたハードルが高い作品ではありますが、今年は大政奉還150周年！幕末が生んだ日本の巨人鉄舟の平和への情熱を多くの方々に伝えたいと語り部の使命に燃えて全力で取り組んでいますので、是非、来場願います》

潮見さんはシンガーソングライターで、お父上は日本の吟遊詩人・高岡良樹氏、1987年に「朱鷺絶唱」で文化庁芸術祭賞を受賞されている。

10年ほど前に高岡氏の創作「山岡鉄舟貧乏噺し」を拝聴し、同氏と人間鉄舟について語り合ったことがある。

5月3日、千葉市文化センターの「潮見佳世乃・歌物語コンサート・山岡鉄舟貧乏噺し」は、期待に違わず素晴らしかった。鉄舟を語る声量に圧倒され、中でも、駿府における西郷との談判場面、迫力に満ち、江戸無血開城を決めた鉄舟を叙情的に表現している。「貧乏噺し」ではなく「江戸無血開城駿府談判」とタイトルを変えた方がよいのではないかと思ったほどで感動したが、これは多分、潮見さんが「鉄舟を知れば知るほどすごい人」と評価する感受性豊かな人間性が影響しているだろうと推察し、今後も鉄舟を語っていただきたいと思う。

「明治天皇と鉄舟」「鉄舟と清水次郎長」「鉄舟と三遊亭円朝」「鉄舟と天田愚庵」等、歌物語への材料は多くあり、今後を待ち望みたい。次月からは明治時代の円朝に入りたい。



漢詩研修 (九)

千代田岳精会 平井茂行

後夜ゴヤ仏ブツ法ホウ僧ソウ鳥チヨウを聞きく

空クウ

海カイ

閑林カンリン独坐ドクゾ草堂ソウドウの曉アカサキ

三室さんぼうの聲こえ一鳥いつちように聞きく

一鳥いつちよう声こえ有あり人心みこころ有あり

声せい心しん雲水うんすい俱ともにりよう了りよう了りよう

閑林獨坐草堂曉

三寶之聲聞一鳥

一鳥有聲人有心

聲心雲水俱了了

【詩意】

仏教と関係の深い鳥の鳴き声を聞いて、空海が宗教的な深みに到達していくという詩の内容。

【空海】

774～835、平安時代 嵯峨天皇の世、宗教的に高みに達した僧で、弘法大師と呼ばれる。31才の時に唐へと渡り、帰国して真言宗の開祖。高野山に金剛峯寺を建てる。漢詩も大いに学び嵯峨天皇に唐詩を伝えた。また書にも優れ嵯峨天皇、橘逸勢とともに三筆と称せられた。

【大意】

閑かな林の中の草堂で夜明け方独り坐っていると、〃仏法僧〃と三宝を唱える一羽の鳥の鳴き声が聞こえてくる。この一羽の鳥には仏の教えを説く声があり、人にはその教えを感じる心がある。それらの声と心が、さらに雲や水の流れと感應し合い、悟りを表しているのは明らかだ。

【語釈】

後夜Ⅱだいたい午前五時頃。

ブッポウソウと鳴く鳥Ⅱフクロウ科のコノハズク。

雑草とは何

夏 目 勝 弘

人間の生活圏に勝手に自生する、草本が雑草と見なされる。(雑草大鑑の著者、浅井元朗)。これは人間の目から見た見方。

草々は人間が、その土地に住む以前より先に生きつづけてきた。草々が言葉を話せるなら、それは違うと言っただろう。

今は自分も浅井氏の説によつて、雑草と見て処理してゆく。空気が数坪余りの所に住んで居るが、四十余种の草々に苦戦している。

五年ほど前にドクダミに苦しめられ、ついに除草剤を使つてしまった。

ドクダミには子供の頃に、出来物を治すため、ドクダミの葉を柿の葉に包み炭火で蒸し焼きにし、治した事を思い出す。

だが今は雑草として、絶やしてしまつた。

○あしたより雨ぐらく降る庭隅にとほと目立つどくだみの花土田耕平の二首が浮んできた。

この五年間で、除草剤によつて絶えてしまつた草々は、オオバコ他十余種ある。

土屋文明の一首に

○庭さきに今年車前草が二つ萌ゆその繁殖の経路は知らず

三年前除草剤をかけながらオオバコに気付いたが、もう除草剤をかけてしまつた。

除草剤を使い始めてから、年々庭に生えてくる草々に変化が出てきた。

二年目には、チチコグサ、ハハコグサが繁茂し、そして次の年には、オッタチカタバミが繁茂した、そのなかに少数のキキヨソウ、ユウゲシヨウに可憐な花が咲いた。

今年は種を散播いたように、キキヨウソウが繁茂している。

ユウゲシヨウは、繁茂する、キキヨウソウのなかで、ピンクの花でアクセントをつけてくれている。

今年から除草剤の使用を止めにし、キキヨウソウとユウゲシヨウを残し、他の雑草は手で抜き取つてゐる。

除草剤で総てを雑草として枯らしても、待つていたとばかりに、次つきに草の芽が出てくる。どのような草々が出てくるかは、わからない。

そして絶えてしまつたと思つていた、ニワセキシヨウが、玄関の横に置いてある、大瓶の陰から、除草剤より逃れた一株が立ち上がり、花を咲かせている。

土屋文明の

○庭石菖に白花のものが交ざりたり我には新しき今日の小さき知見
この一首のように白い花が咲いている。この一首の下句の(今日の小さき知見)を自分も味わつた。

また今年の草々に異変が見られた。ホトケノザとヒメオドリコソウが白化し枯れてゆく、この二種類の雑草に表われた現象である。この二種類は来年は見られないかもしれない。

○春の野のなづな清白花に咲けど仏の座こそあはれなりけり(尾山篤二郎)

そして北側の日陰の庭には、今年はタチイヌフグリ繁茂している。桶の雨水をそのまま流しているためか、風で飛んできた種が原因なのかもしれない。

そして除草剤にも絶えることなく、ヤエムグラが繁茂をつづける。何故か今年は日当りの悪い北側の家の陰にイヌムギが勢いよく、小さな群落をなしている。

(日本薬局方)の生薬総則には(医薬品各条、生薬等)として324品目が定められている。薬草として役に立つ草々も、一般的には雑草として除草剤の対象になつてしまふ。

除草剤によつて一時的に枯らされて絶えたと思つても、動けない植物には、強かな種を守る術を備えている。

人間が死滅しても、草々は絶えることはない、無駄な足掻きはやめて、草々と共に生活して行くことにする。

「氷魚」のことから (198) 岡本八千代

春休みの連休に、曾孫がわが家に二人来た。男と女の曾孫でまだ二人とも保育園児である。

ある時、曾祖父が「いい子だよー。ねんねしな」と男の曾孫に歌った。『いい子じゃないうー、ねんねしないうー』と言ひ返した。それを聞いた私は、男と女の性のちがいを生まれながらにしてあると感じた。

漱石と子規の、男同士の友情のどこかユーモアのあるものを感じとっていたのであった。

かくして、子規の「七草集」から感じ取った何かを、漱石は、ただちに「木屑録」として発表したのであった。男同士の心と心の不思議な縁が續いてゆくのであった。

さて、今回は、

・「水底螺石布列、如可捫而觀焉。倒竿而測其深、則至没竿水觸手而不能達也。」

・右は、水の底に貝がらのついた石が並んでいるのが手にとるように見える。ところが、竿を入れて深さを計ろうとすると、竿がすっかり水中に入ってしまったも先が海底にとどかない。つまりそうとう深いことだ。

・子規は、この文を改定提案している。(改「則至没竿」爲「竿盡」如何)と。

・「蓋潮水澄清、日光透下而屈曲、故水底物浮浮焉如在近、而其实在数尋之下矣。」——これには子規の批

評三つ。

・「水底物」は「之」を入れて、「水底之物」としたほうがよい。二つめは、「屈曲」二字使漢學者流見之則以爲誤寫矣」：「屈曲」の二字がおかしい。

・三つめが決定打。

「自蓋潮云々至数尋之下矣不過解釋前段却滅殺風味割愛如何」削除するがよからう。——と子規は云う。子規が絶賛しているところを見る。

「余在京聞鯛浦之奇熟矣、乃賃舟而發。距岸数町有一大危礁當舟。濤勢蜿蜒延長而來者、遭礁激怒、欲攫去之而不能、乃躍而超之。白沫噴起與碧濤相映、陸離爲彩。」……

・子規は「波を人の如く言いなし、怒と言ひ、攫と言ひ、躍と言ひ、是の如きつづけて是らの語を用いしは恐らくは漢文に未だなかるべく漱石も恐らくは気がつかざりしならん。されど漱石因より英語に長ずるを以て知らずくにここに至りしのみ。実に一見して波濤激礁の状を思わしむ」とほめている。

子規が最初上京した明治十六年頃から二十二年頃まで、松山と東京の間はほとんどが舟であつたらしい。松山の三津浜から神戸まで船、神戸から横浜までまた船(こちらは汽船) 横浜東京間のみ汽車であつたという。漱石は、

・「礁上有鳥、赤冠蒼脰、不知其名、濤来一搏而起、低飛回翔、待濤退、復于礁上。」と着目している。美しい処を観ているなあ。

ことのはスケッチ(46)

今 泉 由 利

(新古今202)

○藤原俊成 永久二年(一一一四)―元久二年(一二〇四)
平安時代後期から鎌倉時代初期の公家、歌人。藤原定家の父。

新古今時代の主だった歌人の師匠であり、「古来風鉢抄」「長秋詠藻」「詞花和歌集」に採録。後白河院の命に「千載集」を撰進。後鳥羽院の命に「千五百番歌合百首」など詠進。

古今和歌風形式に大きな役割を果し、名実ともに歌壇の第一人者であった。

蒲郡俊成短歌大会は、十二回を続けられ、平安時代に三河の国司を務められ、蒲郡を開発し、熊野三山や江州竹生島から自社を勧請された俊成、定家以来の歌学を今に継承されている。

藤原俊成の歌

・ながめするみどりの空もかき曇りつれまざる春雨ぞふ
る
(玉葉102)

・面影に花のすがたを先だてて幾重越えきぬ峯の白雲

(新勅撰57)

・いくとせの春に心をつくし来ぬあはれと思へみ吉野の花

(新古今100)

・雨そそぐ花橘に風過ぎて山ほととぎす雲に鳴くなり

藤原俊成の歌論。

歌はただよみあげもし詠じもしたるに、何となく艶にも、あはれにも、聞こゆる事のあるべし
(古来風鉢抄)

○明恵上人 承安三年(一一七三)―貞永元年(一二三二)

紀州、有田に生まれる。鎌倉時代の華嚴宗の僧侶。後鳥羽上皇より梅尾の地を下賜され、高山寺を開山。栄西請来の茶の種子を梅尾に播き、茶の普及をした。

・あはれ知れと我をすすむる夜はなれや松の嵐も虫の鳴く音
も
(玉葉615)

・山寺に秋のあかつき寝さめして虫とともにぞなきあかしつ
る
(上人集)

・くまもなくすめる心のかがやけば我が光とや月おもふらむ
(上人集)

文覚上人遠忌の日

・九めぐり春は昔にかはりきて面影かすむ今日の夕暮

(風雅2039)

・書きつくる跡に光のかがやけば冥き道にも闇ははるらむ

(新勅撰624)

いそを
まつふ

三河アララギ発祥の地。ゆかりの地。

御津磯夫の孫、長田亜子画

いそを まつふ

今泉忠男(マネム御津磯夫)のゆかりの地を巡る

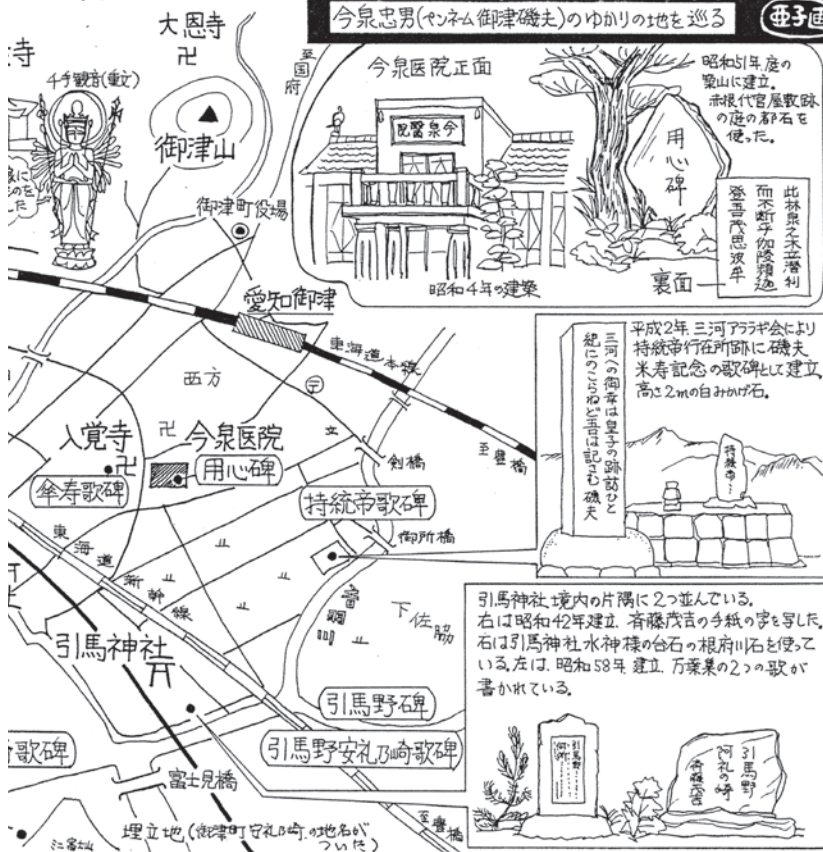
亜子画

入覚寺境内の傘寿歌碑

昭和57年、磯夫傘寿と三河アララギ会
創立五十周年を記念して建立。石は、
長野県飯田の熊谷山氏が天竜川上流
の青石をよがしてくれた。



参考：愛知御津←三河大塚 約3km
今泉医院←萩原神社 約2km



今泉医院正面



昭和4年建築

昭和57年度の
衆山に建立。
赤根代官屋敷跡
の庭の都石を
使った。

此林之本増利
而不斷乎如陰
登吾代思坂半

裏面



平成2年、三河アララギ会により
持統帝行在所跡に磯夫
米寿記念の歌碑として建立。
高さ2mの白みかげ石。

引馬神社 境内の片隅に2つ並んでいる。
右は昭和42年建立。有藤茂吉の手紙の字を写した。
石は引馬神社水神様の台石の根府川石を使っ
ている。左は、昭和58年建立。万葉集の2つの歌が
書かれている。



編集室だより【二〇一七年五月】

○NYを拠点にしている玉由が、仕事で東京に来ている合間に、中野をリサーチするという。中野ブロードウェイ商店街、中野サンモール商店街。学生時代、通り道にしていたところだから、知っているつもりだったのに、私の知識は何の役にもたたなかった。

過去も現在も…何でも用事が足りる、何もかもが可能になるところ。この近くに住めば、生活がスムーズに成り立つだろう…と感心してしまう。

スマホで写した写真を取り出す方法がわからず困っていたところ、スマホなどのことが何でも解決できる店があった。そして、念願「二枚の写真」を取り出すことができた。便利に暮らせるのに、ひとつ手間どっている、もつと積極的

に今の世に適応しながら暮らさなくてはと思い当る。ここに来れば、過去も現在も、未来でも思い叶うのだから。たらの芽・路の臺・そらまめ・玉葱・天プラに、八海山の夜となった。

○「今日は、秋葉原リサーチだよ！」以前は、しばしば通りがかったところだけれど、最近是用事がなくなっていた。様々なコンサートを盛りあげるグッズなど…まったく知らないことが主流である場を、こんな機会はまたとないだろうから…場ちがい感もなんのその。私と同じ世の中で、

こんなことが起っている。私の世を見る目が変わったかもしれない。

○「御徒町・上野・リサーチ」

つい最近来た時よりも日本が無くなっていた。そして、こんな風に変化することが日本なのだ…と知る。

昭和の居酒屋をみつけ、昭和に戻ってみた。ハイボールで、コロッケとメンチカツ。みんな知っていることばかりのなかで。

○神楽坂吟行

早稲田通りにおける、大久保通り交差点から、外堀り交差点までの坂が神楽坂。

午前中は「坂上↓坂下」、午後は「坂上↑坂下」と逆転式二方通行の感覚をなんとか自身に残そうと「夏の日も坂上坂下組み替はる」。

毘沙門天善国寺、日蓮宗の寺院。狛犬ならぬ狛虎が、そこで「毘沙門を守る寅毘沙夏日向」「インドより来たれし神に樟若葉」。

縁のない「花街」の、黒塀、石畳、酒杯、三昧の音…「若葉風三昧の音のせて吹きゆきぬ」

○表装と裏打

自作のクロッキーを、裏打、表装しようと試みている。和紙ではなく、クロッキー用紙に描いてあるから、のりや水や…何度もさらされ、溶けてしまわないだろうか！心配だけれど、試してみなくてはわからない。実行中。

野菜の花（13）

鈴木 孝 雄



○ バジル

バジルには色々な種類があるが、写真は最も広く栽培されているバジル(basil)で、スイートバジル(sweet basil)あるいは、イタリア語由来のバジリコ(basilico)の名でも知られる。写真では残念ながらはっきり見えないが、輪生する6つの白い花は丁字(clove)の香りがする蜜を持っており、蜂やコガネムシが盛んに蜜を求めてやって来る。

私にとって花は邪魔で、花芽が出るとせっせと摘んでしまい、脇芽成長を促すのが常だった。ところが最近人気のチアシードと同様に、バジルの種（バジルシード、basil seeds）が大変有用な事を知った。バジルシードは水を含むと体積が30倍にも膨らみ、透明なゼリー状の粘膜で覆われる。膨潤度はチアシードよりも大きい。味は無味無臭で食品に混ぜて食べると、腹の中で膨らむため満腹感を得ることが出来る。バジルシードは低カロリーで食物繊維がチアシードより多く、糖尿病予防ダイエット食品として注目されている。

江戸時代、種子が水で膨潤して粘膜を生成する性質を利用して、眼に入ったゴミを洗うのに用いたことが、和名メボウキ（目簪）の由来と言う。

バジルの葉は摘み取って処理が悪いと葉が酸化して黒変する。これを避けるには切断面を薄い塩水に通すと良い。洗った後は水をよく拭き取ってポリ袋やタッパウェアで冷蔵庫保存する。

今年も5月上旬に種を蒔き、芽が出たところ。6月末には清涼な香りとちよつとスパイシーな新葉が賞味できそうだ。今秋、葉の収穫が終わったらバジルシードを楽しもうと思う。

次回はモロヘイヤの花の予定です。

お知らせ

△八月号の原稿は、六月三十日(金)までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。
郵便の休配(日曜、祝日)を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月
の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アラギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の一六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アラギ」について

◇三河アラギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。
振替口座〇〇八三〇一六一五六三二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することが出来ます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アラギ発行所・〒一一四一〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六一六A
TEL・(〇三)五九二四一二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美